

ニカラグア・サンタフェ橋 開通式に参加して

写真・文 加賀美 充洋
Mitsuhiro Kagami



写真① サンタフェ橋

ニカラグアは中米にある。北はホンジュラスに、南はコスタリカに国境を接している人口六一九万人、国土は日本の三四％という国である（地図参照）。筆者はこの国の日本国大使として二〇〇三年から二〇〇七年まで駐在した。昨年八月二五日に突然在京ニカラグア大使館から、サンタフェ橋（写真①参照）の開通式を行うので、齋藤伸一大使（日本貿易振興機構より筆者の次の大使に任命される。ニカラグアは二代続けてジェトロ関係者が大使を務めた）と一緒に招待するから二八日に来て欲しいという連絡が入った。式典は八月三〇日のことである。それにしても突然の話である。この日本の援助案件は筆者が二〇〇六年に現地から東京に申請して、国際協力機構（JICA）が何回か事前調査を行い、〇九年一月と一〇年五月の二回にわたり二国間で交換公文が締結された。その交換公文に署名したのが齋藤大使（二〇〇七～一〇年）

ニカラグアの地図



（出所）<http://n.freemap.jp/tp/nicaragua> の白地図を利用して筆者作成。



であった。橋の工事は二〇一二年から行われて二〇一四年四月に完成した。

ニカラグアは火山国で、またハリケーンもあり災害が多いにもかかわらず道路や通信のインフラ部門が未整備であった。とくに幹線道路は琵琶湖の一二倍といわれるニカラグア湖の左岸太平洋沿いを走る「パン

アメリカン・ハイウエイ」一本しかなかった。

これが災害で分断され
ると、人も物資も同国
に迅速に入れない危険
性が大変高かったのだ

ある。そのためニカラ
グア湖を挟んで右岸側
にもハイウェイを作る
という案は筆者が行く
前からも存在していた。

ニカラゲア湖は、東南のサンカルロスという町から流れ出て（写真②参照）サンフアン河

と呼ばれる長い河となつてカリブ海に注いでいる。このサンファン河に橋を架けてコストリカの国境までの道路を整備すれば、災害対策の

みならず経済動脈として中米全体に好影響を与えるといわれていた。

二八日の夜、首都マナグアに到着したが機上からみるマナグアは七年前と比べて光が多い。家々の電気のみならず、ネオンサインやイルミネーションも輝いていて光が増え、経済的に発展したという印象である。確かにIMFの統計によると二〇〇五年の一人あたりGDPは一一四〇ドル、二〇一三年は一八四〇ドルと一・六倍になった。飛行機が到着するとすぐにマルティネス運輸・インフラ大臣とアラナ在京ニカラグア大使が我々を迎えてくれたので恐縮した。

翌日起きてホテルからみると、目前にマナグア湖が広がり（写真③参照）、モモトンビート火山がみえた（写真④参照）。以前は、噴煙は出ていなかったが、今回出ているのが気がかりであった。マナグア市内を見学したが、町は車が多くなっていて、また道路にゴミが前より少なくなってきたいになった印象を受けた。ホテルの近くにあるロータリーに、ブリキでできた大きな木の飾りと、ベネズエラの一昨年亡くなったチャベス大統領の顔が設置されていた（写真⑤参照）。同国は、石油をベネズエラに大量に依存している背景がある。夜になるとイルミネーションが点灯されて明るくきれいだである。また他のロータリーには、ニカラグアが生んだボクシングの三階級王者にしてマナグア市長であったアレクシス・アルグエジョ（二〇〇九年自殺したと



写真⑦ 火口が見えないマサヤ火山



写真⑥ アルグエジョ市長を記念して



写真⑨ サンタフェ側から見た橋



写真⑧ 給油中のロシア製ヘリコプター

いわれている)の肖像も作られていた(写真⑥参照)。マナグアから近い活火山のマサヤ火山はもうもうと噴煙が立ちあがり、以前は火口のなかを覗けたのであるが、今回は全く見えなかった(写真⑦参照)。モモトンビートを含め今年は火山活動が全体的に活発化しているらしい。

三〇日(土)は朝

八時半までに飛行場に行く。軍のヘリコプターでサンタフェ橋まで行くそうので、同行者は、マルティネス大使、アラナ在京大使、日本国大使館より佐藤正晴大使ほか二名、JICA事務所より二名、世界銀行ならびに米州開発銀行当地代表、斎藤大使、筆者等であった。世銀と米州開銀が加わっているのは、橋に繋がる道

路建設に融資したからである。ヘリコプターは一時間でサンカルロスに到着(写真⑧参照)、そこで給油をしてさらに一〇分程サンファン河に沿って東に飛びサンタフェ橋が見えてきた。上空を旋回してくれたので写真が撮れた(写真⑨と⑩参照)。ヘリコプターはなんと高速道路路上に着陸したのには驚いた。現地では工事を担当した間組とセントラル・コンサルティングの関係者の方々も来られていた。なおオルテガ大統領はボナンザで発生した鉱夫の生き埋め事故対応のため欠席となった。

橋は四月に完成したが今まで公式には使用されておらず、本日が開通式であった。式典は一時から始まり、マルティネス大臣を中心として橋の入口に置かれていた簡易ゲートを開いて始まった。テレビ局、新聞社等の報道機関や見学の人々で周辺は大混乱であった。橋は一番高い所で水面より一七メートル、長さ三六二メートルありパナマ運河の二つの橋を除けば中米最大の橋である。日本はこれに約三〇億円の無償資金協力をを行った。橋を全部渡りきるのに二〇分位かかり真夏の太陽光が頭を直撃して毛のうすい筆者は痛くなったほどであった(写真⑪参照)。南側の橋の欄干を支える柱のところに碑が埋め込んであり日本の援助でできた両国友好の橋であると書いてあった(写真⑫参照)。

橋からコスタリカ国境まで舗装された道路八キロメートルを車で移動した。周辺は

1943年生まれ。1967年国際基督教大学卒、アジア経済研究所入所。
2000年JETRO理事。03年ニカラグア日本国大使。07年JETRO・バンコク研究センター
所長。11年帝京大学教授、現在客員教授。



写真⑪ 橋の上で記念撮影



写真⑫ 両国友好の碑（2014年4月完成）



写真⑬ 鉄条網の向こうはコスタリカ



写真⑭ オルテガ大統領と（左から佐藤在マナグア大使、オルテガ大統領、齋藤大使、筆者）



写真⑩ 河を横切るサンタフェ橋

広大なオレンジ畑でコスタリカに輸出してジュースにしている。国境のニカラグア側には税関やパスポート検査場の新しい建物ができていたが、コスタリカ側はそうした新しい施設もなく、道路も荒れた舗装のままであった（写真⑬参照）。両国には領土問題があり、橋の経済効果は両国が享受できるにもかかわらず協調する話が今までのところなかなか進まないようである。

さらに九月一日の夜、我々二名に佐藤大使を含めてオルテガ大統領に表敬訪問する機会が与えられ驚天動地であった。筆者自身は同氏と会うのは三回目であったが、外務省で待機して九時少し前に私邸に呼ばれ、同国の英雄サンディノ（サンディニスタの名前の由来）の大きな額がある部屋

で面談した（写真⑭参照）。筆者は古稀の老人なので失礼を大目にみてもらい、開発のアイデアはいつでも提供するのでもた呼んでくださいと言ったら大統領は無言で笑っていた。ところが、帰り際に玄間の所で「また来年来てくれ」と返してきた。サンディニスタの闘士としてならした強面コマンダンテ・オルテガではあるが案外冗談のわかる人なのかもしれない。

最近同国では運河建設の話が進んでいる。水の流れ、物資・人の流れ、環境、地政学バランスを大きく変える計画の行方を注意深く見守る必要がある。最後に政府招待としてこうした貴重な経験をさせて頂いたニカラグア政府、特にマルティネス大臣に心より御礼を申し上げる。